

令和6年度 学校評価 自己評価まとめ

学校評価委員会

評価対象		評価項目	評価の観点	評価	昨年評価	成果	課題
1	学習指導	・自ら学ぶ姿勢 ・授業改善 ・基礎学力の定着	・それぞれの授業において「言語活動」を意識し、対話的な学習活動に取り組んでいくことで生徒が主体的に考え学ぶ姿勢を育てていく。 ・授業評価アンケートを実施して授業改善に活かす。	2.35	2.94	対話的な学習活動を行うことで、生徒とのコミュニケーションが増え、主体的に学ぶ姿が見られた。クラスメートと考えを共有する時間を設けることで、自身の考えを述べようとする姿勢も育まれた。授業評価アンケートを実施し、	基学や朝読書など全員が取り組む活動への意欲が低く、学習効果を感じられない。学力差や学習意欲の差が大きく、特に学力下位層へのアプローチに工夫が必要である。授業評価アンケートを活用した改善を進めたいが、匿名性のため対応が難しい。文章力が乏しい生徒は深く考えず「わかりません」と答えることが多く、人間関係を含めた学び合いの環境作りも課題である。学校全体で指導の統一を図り、成果や課題を共有しながら改善を重ねる必要がある。
			・「基学」、基礎力診断テスト、各種検定の受検、読書週間など多様な取り組みにより、生徒が自ら基礎学力の伸長と教養の涵養（自分をカルチベイトすること）を意識するよう図る。	2.06	2.88	板書や授業展開を工夫した。基学や読書週間など多様な取り組みを実施し、資格検定やテストも行った。文章力向上のため、長文の回答を複数人で構成する活動を行い、ICTを有効に活用することを意識した。	
2	生徒指導	・規範意識 ・人権教育 ・自他の尊重	・規範意識（ルールを守ろうとする気持ち）の向上を働きかける機会を定期的に設けるとともに、お互いを尊重する人権感覚を育てる教育活動を行う	2.06	3.13	各行事や集会で規範意識の向上を促し、SHRや授業を通じて細やかなコミュニケーションが取れる雰囲気醸成している。挨拶を徹底し、分掌の係では連絡・相談を欠かさず行うことで、	生徒の状況に合わせた指導を行うため、学校全体で取り組む必要がある。規範意識の低い生徒への具体的な対応策が不足しており、指導が個別対応にとどまっている。学校全体で規範意識や人権感覚を育てる機会を増やし、事前にトラブルを防ぐ環境づくりが求められる。また、学校と保護者、社会との意識の違いを話し合い、相互理解を深めることも重要である。
			・生徒が円滑な人間関係を築くことができる力を身につけるため、教員・生徒相互に挨拶や礼儀を重んじるとともに、連絡相談など日常的に細やかなコミュニケーションができるような雰囲気を醸成していく。	2.12	3.19	トラブル回避につなげた。HRや授業での注意喚起や頭髮服装検査により、一定の成果も得られている。家庭との連携も重視し、こまめな連絡を心掛けながら、生徒への対応に努めている。	
3	キャリア教育	・進路指導 ・自己指導能力の育成	・就業体験や講演会、適性検査などを通してキャリア教育への取り組みを進め、生徒が自らの未来について考え、将来、社会の中で主体的に生きていくことができるよう図る。	2.59	3.16	就業体験や講演会、適性検査などを通してキャリア教育を実施し、1年次から段階的に進路決定に向けた取り組みを行っている。外部講師の講話や進路面談を通じて、生徒の意識向上を図っている。特に就職に向けた進路行事が充実しており、生徒も意欲的に参加している。進路	進学・就職に必要な学力の育成が十分でなく、生徒の学習意識が目先の考査に向けられがちで、長期的視点を持った学習習慣の形成が課題である。困難を抱える生徒ほど自己認識が不足しているため組織的な対応について検討が必要である。進路決定においては、生徒と保護者の合意が十分でない家庭もあり、指導の工夫が求められる。学校全体で社会で主体的に生きる力を育む取組の精選と実効性向上が必要である。
			・卒業時の進路決定を見据えた取り組みを1年次より段階的に行い、意識を高めるとともに、進学・就職に必要な学力の育成に努める。	2.12	3.09	遠足やSST講座の実施により、人間的成長を促す機会も提供できた。明確な進路が決まっていない生徒も多いが、考える機会を多く設けることで主体的な学びにつなげることができた。	
4	社会に開かれた教育活動	・地域連携 ・地域資源の教材化 ・自主活動（生徒会・クラブ）	・地域の資源に着目した教育活動や各種交流活動に取り組み、地域とのつながりを意識した活動を行い、将来、地域のために貢献できる人材の育成に努める。	2.65	3.00	農業高校の特色を活かし、地域との関わりを深める取り組みが多く見られた。生徒会や農業クラブ、課外活動に積極的に参加する生徒たちは、生き生きとした様子が印象的で、地域貢献活動にも積極的に取り組んでいる。また、保育基礎の授業では地域での教育活動を通じて、地域に根差した教育機関として認識され、地域からの感謝も得られた。気候変動に配慮した服装規定の見直しや、外部イベントへの意欲的な参加を通じて、社会性を向上させることができた。地域活動への協力や災害支援活動にも積極的に参加し、社会貢献を意識した人材育成に貢献している。	長野市の地域資源を活用した学科改編や学校再編の取り組みが必要である。また、クラブ活動に参加しない生徒が多く、三年間で「これに打ち込んだ」と言える経験を持つ生徒が少ない現状があります。地域貢献できる人材を育成するため、学校全体での工夫と実行が求められる。さらに、生徒会や農業クラブ、課外クラブ活動で多くの生徒が自発的に参加し、主体的な活動ができる仕組みを模索する必要がある。
			・生徒会・農業クラブ及び課外クラブ活動への生徒の自発的な参加と主体的な活動に取り組むように促す。	2.53	3.03		

評価対象		評価項目	評価の観点	成果と課題
5	農業教育	1年 (基礎教育)	農業科の基礎科目の学習を通して、2年進級次のコース選択において興味関心を持ち主体的な選択ができるよう指導する。	農業の基礎だけでなく、実習に取り組む姿勢や実習服の着方等基本的な部分もしっかり教育されているため、2年生の授業で実習を行う時にスムーズに始めることができている。 コース選択については、もっと内容を知って体験してから選択するべきと感ずるため、来年度からの総合実習でのコース体験授業は期待している。
		A 生産技術	作物生産技術を中心に、機械、土木系資格取得、技能習得に積極的に取り組み、関連する地域産業に貢献する人材育成を目指す。	Aコースの生徒は、様々な活動に参加する機会を得ており、多くの経験を積んでいる。作物を教材とした新たな生産技術の探究に成果を得た。資格取得や技能習得にも積極的に取り組み、多くの生徒が資格取得に自信を深めた。嬉捨の棚田の環境と景観の保全に関する意欲的な活動や発表を行い、地域との関係・交流も広がっている。進路については、自己の適性や可能性を探り、全員が希望を実現した。
		B 流通経済	簿記能力検定において商業科卒業生徒と同等以上の技能を習得し、事務・販売・流通系で活躍が可能であり、かつ水稻を題材とした研究を深めて善年制大学、短大、大学校への進学もできる人材の育成を目指す。	研究発表会での発表を通じて、これまでの「簿記」のイメージが「経営」へと変わり、中学生や地域の関心も今後高まると考えられる。資格試験に向けて放課後も残って学習に励む姿が見られた。 2年生は全経簿記検定2級に挑戦し、半数の生徒が合格した。さらに、日商簿記検定2級に挑戦する生徒もいる。また、税に関する高校生の作文に取り組み、入賞を果たした。 3年生は企業見学を通じて地元酒造会社から栽培の協力依頼を受け、酒米の生育調査を研究した。また、本校で栽培している「風さやか」の魅力を地域へ発信する活動について研修を行った。 4年制大学を希望した生徒は進学を実現した。
		C 食品科学	食品の成分分析ならびに食品加工技術を学ぶとともに、地域の農産物を生かした加工品の開発などを目指し、食品関連産業に貢献できる人材を育成する。	生徒が加工した製品を調理実習で使用したいという声が聞かれた。市販品ではないオリジナルの製品にこだわる姿勢が素晴らしいと感じる。 2年生は、食品化学、食品製造、微生物の基礎を習得しながらレポート作成に取り組み、まとめる力を身につけた。3年生は学んだ知識・技術を応用し、課題研究の授業で新たな加工品の開発や食品成分分析に探究的に取り組み、成果を発表した。文化祭やイベントでは、地域の方々に加工品を販売する機会を得た。 進路については、食品関連産業へ就職する生徒もあり、今後も地域に貢献できる人材の育成に努める。
		D 環境科学	身近な環境についての各種調査・研究活動を意欲的に取り組むと同時に、その成果をもとに信州の環境の実態やこれからの農業についての自分たちの考えを様々な機会に発信し、地域の環境や農業を守る人材を育成する。	日頃の指導により、生徒の規範意識が保たれている。 2年生は、環境科学、食品製造、食品化学を習得する中で、トマトジュースの原材料である加工トマトを鶏糞などを用いて環境に配慮した栽培を行い、レポートにまとめた。3年生は学んだ知識・技術を応用し、課題研究の授業で食品残渣や食品製造排水を微生物の力で分解し、廃棄されるカイロに含まれる鉄を植物栽培へ活用する研究に取り組んだ。また、農業技術検定では約7割の生徒が3級を取得した。 進路については、食品・環境分野に限らず、多方面へ就職・進学している。
		E アグリネットワーク	栽培基礎的な学習とその利用について考え、農業の楽しさ・食の大切さなどを地域に発信するための「農業」「園芸」を活かした交流活動を考えて実践する。活動を通して地域と社会に貢献する意識と、自らのコミュニケーション能力を向上させ、卒業後も多方面において活躍できる力を養う。	多くの交流を重ね、生徒のコミュニケーション能力を向上させることができた。 特に3年生は月に1回のペースで交流実習があるため、最初の頃に感じた課題を次の交流に活かすことができた。 今後は、もっと長野市の地域資源を見つけて地域に求められる交流を行なっていきたい。学科改編でこのコースは解体するため、新しいコースに繋げられるような学習内容に少しずつ変えていき、引き継げる活動は他のコースに渡す等、今行なっている活動の見直しもしていきたい。
		F 園芸デザイン	草花の栽培管理の知識・技術を身につけるとともに、それらを生かした交流・販売活動を実践する。地域連携を経験することでコミュニケーション能力を養成し、地域貢献できる人材を育成する。	生徒は花の栽培に関する実習を通じて、自主性や知識を高め、地域との交流を通じて生きる力を育んでいる。篠ノ井駅前トララク市での販売活動では、地域の方々と積極的にコミュニケーションを取る姿が見られた。また、善光寺花回廊や篠ノ井駅前花壇、篠ノ井病院前花壇への植栽交流を通じて、実習前の説明と実体験を組み合わせ、技術やコミュニケーション力を養い、地域貢献を実践している。
		G 施設野菜	野菜栽培の技術・知識の習得や、新しく導入した水耕栽培やココバック栽培の施設で情報通信技術（ICT）を活用したスマート農業を理解する。地域農業と生産現場の担い手となるスペシャリスト養成と、地域社会に主体的に貢献で	小森ナスについて地域の中で抱えている課題を見つけ生徒の知識や技術を最大限に活用できる対応策を考え、実践することで地域の活性化へ貢献した。 ココバック栽培や水耕栽培では、栽培技術のノウハウが乏しく、高い生産を実現することができなかった。今後は、研修参加やデータ収集などをおこない、農産物の質と量の向上を目指したい。
		H 果樹科学	果樹の栽培管理を通じて、知識・技術ならびに態度を身につけ、地域産業の担い手を育成するとともに、地域社会に主体的に貢献できる人材育成を目指す。	今年度の果樹栽培学習では、基礎的な知識と技術の習得を目指して実施された。2年生はモモの栽培調査を行い、3年生はモモとブドウの省力化栽培方法や高品質化栽培の研究を続けた。また、校内ではわい化りんご樹の果実品質調査や鳥害対策にも取り組んだ。地域農業への貢献を目指し、地域密着型の活動再開が望まれ、栽培規模の見直しや適正な管理が検討されている。今年度、生徒は地域で果樹生産物の振り売り販売を再開し、地域産業の担い手育成に貢献した。食糧需給率の低さを教科内で学びながら、この活動の重要性を実感した。